（様式第１号）（第２条 16 号関係）

別紙

福祉サービス第三者評価の結果

１　評価機関

名称： コスモプランニング有限会社	所在地： 長野市松岡１丁目 35 番５号
評価実施期間： 令和 ４年 10 月 ５日から令和 ４年 12 月 ７日まで	
評価調査者（評価調査者養成研修修了者番号を記載） Ｂ１８０１４、０５０４８２	

２　福祉サービス事業者情報（令和　４年１０月現在）

事業所名： （施設名）　長野市後町保育園		種別： 保育所	
代表者氏名：　市長　荻原　健司 （管理者氏名）　保育・幼稚園課長　丸山　隆文		定員（利用人数）： 45 名（14 名）	
設置主体：　長野市 経営主体：　長野市		開設（指定）年月日： 昭和 23 年 ８月 １日	
所在地：〒 380-0845 長野県長野市大字南長野西後町６１４番地６			
電話番号： 026-232-0333		FAX 番号： 026-232-0333	
電子メールアドレス　：　—			
ホームページアドレス：　http://www.city.nagano.nagano.jp/			
職員数	常勤職員：　10 名	非常勤職員:　8 名	
専門職員	（専門職の名称）　名		
	・園長　1 名	・給食調理員　5 名	
	・保育主任　1 名		
	・保育士　11 名		
施設・設備の概要	（設備等）		（屋外遊具）
	・乳児室　…　1 室 ・ほふく室…　1 室 ・保育室　…　1 室 ・調理室　…　1 室 ・事務室　…　1 室 ・便所　…　2 室		・固定遊具なし

３　理念・基本方針

○長野市保育理念（保育所型認定こども園を含む）

子どもの健やかな心身の発達を図り、望ましい未来を作り出す力の基礎を培う。

○児童福祉法に基づき、保育を必要とする子どもを保育することを目的とする。

○子どもの最善の利益を考慮し、その福祉を積極的に増進する。

○長野市保育基本方針

○安全で安心できる生活の場を整え、子どもが自己を十分に発揮できるようにします。
○専門の資格を持った職員が養護と教育を一体的に行い、子どもの発達を援助します。
○保護者の気持ちを受け止め、共に子育てをします。
○家庭と連携を図りながら、子育ての悩みや相談に応じ助言するなど、地域における子育て支援の拠点として、社会的役割を果たします。
○保育を実践するにあたっては、「全体的な計画」に基づき、一貫性を持って子どもの実態に応じた柔軟な保育を展開します。

○長野市後町保育園　保育目標

○友達と一緒に元気にからだを動かして遊ぶ子ども
○自分の思いを伝え人の話を聞くことができる子ども
○楽しく食事ができる子ども

４　福祉サービス事業者の特徴的な取り組み

長野市後町保育園は長野市が直接運営する 28 園(内休園 2 園)と 2 認定こども園のうちの一つで、平成３年２月に２階建ての現園舎が新築落成し、長野市中心市街地の歴史ある保育園として継続的に運営されている。
当保育園は明治 27 年 6 月に後町小学校(平成 25 年 3 月統合のため廃校)子守教習所として発足し、明治 44 年 5 月、後町小学校幼児保育所となった。その後、昭和 19 年に後町国民保育所となり、昭和 22 年の児童福祉法の制定により長野市民生課に移管され昭和 23 年 8 月に後町保育園となった。更に、昭和 24 年 7 月には児童福祉施設としての認可を受け、昭和 32 年 4 月には旧園舎が落成し、平成 1 年 4 月、定員 35 名(現定員 45 名)の小規模園となり、平成 3 年 4 月、現園舎での運営が始まり、31 年の歳月の中で多くの卒園生を送り出している。
当保育園のある長野市西後町は町の東縁を長野駅前から善光寺へと続く中央通りが通り、南縁は中央通りから長野県庁へ通じる寿通りとなっている。町域の多くを寺院や県立大学後町キャンパス、オフィスビルなどの敷地が占め、中央通りから一本西に入った当園の周りは落ち着いた静かな環境が形成されている。江戸時代には、現在の東後町と併せて後町と呼ばれており、善光寺町のうちの町年寄の治める「八町」の一つであった。後町は長野村と妻科村にまたがり、後に長野村後町が東後町となり、妻科村分が西後町となった。町名は鎌倉時代に信濃国の後庁(御庁＝国衙　※国衙（こくが）とは、日本の律令制において国司が地方政治を遂行した役所が置かれていた区画)が置かれたことに由来し、近隣の県町遺跡からも地方では珍しい出土品が見つかっている。
町は善光寺近くにある弥栄神社の御祭礼で中央通りを屋台巡行する御祭礼町 20 町の一つで、1758 年(宝暦 8 年)に御祭礼町に加わったという。町には 1873 年(明治 6 年)に制作された総ケヤキ造りの本屋台があり、更に、1925 年(大正 14 年)に作られた踊り屋台もあり、後町小学校跡地に立った「後町ホール」の一角にある倉庫に保管されている。当保育園の目の前にあり散歩に出掛ける子どもたちも倉庫の扉が開いている時には目にすることができ、その豪華さと華麗さに目を輝かせている。
現在、当保育園の所在地である西後町の人口及び世帯数は 200 世帯 298 人(令和 4 年 10 月 1 日現在)で、税務署、銀行系や大手建設会社などのオフィスビルが立ち並ぶという環境下、昼間人口は多いが夜間人口が少なくなるという特異性をもっており、当保育園の保護者にも働きながら通勤途上にある当園を選択している方がいる。こうした中、当保育園の西隣の後町小学校跡地には平成 30 年 4 月に県立大学後町キャンパスがオープンし、学生寮や地域貢献型施設・ホールがあり、若い学生たちが町の屋台の引手役になるなど地域の活性化という面でも期待がされている。当保育園でも防災面でキャンパスにあるサポートセンターからの支援を受けられるようになっている。
現在、当園には 0 歳児 3 名・1 歳児 3 名・2 歳児 3 名のいちご組、3 歳児 1 名・4 歳児 2 名・5 歳児 2 名のぶどう組の二つのクラスがあり、それぞれの発達段階に合わせて作成された令和４年度「全体的な計画」の「保育方針」に掲げた「遊びを通して元気な心と身体を育てる保育」に沿い、「友達と一緒に元気にからだを動かして遊ぶ子ども」「自分の思いを伝え人の話を聞くことができる子ども」「楽しく食事ができる子ども」という当園の保育目標の実現に向けて職員が小規模園ならではの創意と工夫を凝らし「アットホーム」な異年齢の混合保育に取り組んでいる。

また、当園では保護者の仕事と子育ての両立等を応援するためそのニーズに合わせ多様なサービスを提供しており、現在、時間外保育を実施し、一時預かり、おひさま広場、親子交流体験等についても希望者があればいつでも受け入れができるようになっている。一時預かりについても保護者の就労・保護者の疾病・保護者の育児に伴う心理的、肉体的負担の解消等による預かり保育を行うサービスで当園でも要望があれば受け入れ可能となっている。おひさま広場は未就園児と保護者対象に園開放及び子育て相談を行うサービスでいつでも受け入れることができるようになっており、新型コロナ禍で少ないが次年度に向けて保育を希望する親子の利用がある。親子交流体験は、特別な配慮が必要な未就園児が園児との遊びや給食を通して子ども同士の交流を行い心身の発達を促すという内容でこちらも受け入れが可能になっている。

当園の今年度の事業計画の中に中期なビジョンを明確にしており、2022 年度から 2024 年度までの 3 年間の計画として、「2022 年度に福祉サービス第三者評価を受審する」「長野市運動プロクラムの充実を図る」「運動と遊びのプログラムの活用で運動機能の育成を図る」等を掲げ積極的に取り組み、また、今年度の計画の重点課題に「保育内容の充実」を掲げ、「園外保育、運動遊びの継続」「自然環境に目を向けて保育園でできるＳＤＧｓの活動を考え実践」「子育て支援の実践と充実」等に職員が共働し取り組んでおり、「長野市乳幼児期の教育・保育の指針」の目標「かがやく笑顔で　元気に遊ぶ　しなのきッズ」及び「第二期子ども・子育て支援事業計画　～わくわく子育て　すくすくこども～」の具現化を図ろうと、地区の人々や市街地ならでは社会資源を活かし、少ない職員体制の中で互いに融通し合いながら研修などに参加しチームとしての全体のレベルアップに取り組んでいる。

５　第三者評価の受審状況

受審回数（前回の受審時期）	今回が２回目(平成３０年度)

６　評価結果総評（利用者調査結果を含む。）

◇特に良いと思う点

1）自立に向けた子どもの生活と遊びを豊かにする保育

当園は長野市中心部にあり、善光寺や県庁にも近く、県立大学、商店街、高層の建物など多くの施設やオフィスに囲まれている。現在は未満児 9 名、幼児 5 名の小規模園な園ではあるが、「アットホーム」な雰囲気での異年齢混合保育が行われている。園目標に「友達と一緒に元気にからだを動かして遊ぶ子ども」と掲げ、目標に向け園周辺への散歩に出かけ広い場所や固定遊具で遊ぶ機会を多く取り入れている。

年齢に応じて遊びのコーナーを考え手作り玩具を用意し、各クラスのおもちゃは対象年齢に合わせ、取り出しやすく配置されており、園内では、クレヨン、マジック等に触れたり、お気に入りの曲で踊ったりする機会を設け、自発的に遊びができるように環境を整えている。固定遊具はないが、砂場やままごとをして戸外遊びを楽しみ、夏はプールを設置して水遊びを楽しんでいる。

市街地にある保育園ではあるが、天気の良い日は近隣の公園や公共の施設、商店街へ散歩に出かけ、散歩バックを持ち草花や木の実を拾い自然と触れ合い、広い場所で思いっきり遊んだり、地域の方々と触れ合い、交通ルールなど社会ルールも学んでいる。室内でできる運動遊びを多く取り入れ、リトミックは 2 歳児も幼児と一緒に行い体を動かして遊び、けがをしない体力作りに繋げている。新型コロナ感染前は地域の行事の七夕祭りや花フェスタなどに作品を出店し参加をしていたが、コロナ禍の今は自粛している。そうした中でも、今年度も花フェスタで使用した花鉢の配布が当園あてにもあり子どもたちが大切に育てたという。

「長野市乳幼児期の教育・保育の指針」には目標とする子どもの姿である「しなのきッズ」に「育まれる４つの力」として「自律力」「実践力」「未来力」「絆力」を挙げ、長野市の子どもたちの「知・徳・体」を バランスよく伸ばしていくために基本的な視点として「三つの自立（「生活上の自立」「学びの自立」「精神上の自立」）」を据え、それに基づいた取り組みを進めようとしている。当保育園でも全体的な計画で子どもの総合的な心身の発達のために保育所が目指す目標として「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の５つの領域を定め、少人数ならではの兄弟のような関わりや家族のようなふれあいを大切に、「基本的生活習慣の自立、人・ものと関わる力の育成」「興味・関心・意欲を高める」「自己肯定感、我慢する力の育成」等に取り組んでいる。

2)市街地ならではの自然とのふれあい

当保育園は長野駅前から善光寺に続く中央通りの中ほどを一本西に入った通りに面しており自然が少ない市街地ではあるが、街中の自然を見つけ遊びに取り入れる活動を行い、自然への関心を高めている。

周りには官公庁やオフィスビルが立ち並び、古くからの市街地を形成しているが、逆に公園、県議会議員会館、セントラルスクエア、善光寺など、多くの社会資源に恵まれており、園では散歩を日課とし、0歳児・1歳児・2歳児のいちご組、3歳児・4歳児・5歳児のぶどう組にそれぞれ分かれ、散歩を主とし戸外に出掛けている。

当園では善光寺の門前町の碁盤の目のような市街地の散歩マップを作成しており子どもたちのイラストや職員の撮影した写真などが貼られ、そこには市立図書館や市の中央消防署、街場の中の自然豊かな公園、寺社仏閣などが一目でわかるようになっている。

当園では2020年度に「信州自然型保育(信州やまほいく)」の普及型の認定を受けており、また当園では、長野市公立各保育園が年度に1テーマを設け実施している研究レポートとして、昨年度のテーマを「自然を使った遊びが充実するための環境作り」とし、また、今年度のテーマとして「自然の環境に目を向けられる子どもを育てる～保育とＳＤＧｓ(持続可能な開発目標)　充実した活動に結びつけるための支援～ 」と掲げ、近隣の公園や神社、商店街に散歩に出掛け、お祭りの山車を見学したり、途中で消防署の見学に立ち寄ったりしている。更に、隣接地の後町小学校跡地にはD51形蒸気機関車が置かれた緑豊かな県立大学のキャンパスもあり、訪問調査当日も散歩に出かけ、集めてきた宝物のどんぐりや色とりどりの葉っぱを、帰園時に目を輝かせて誇らしげに見せてくれる子どもがいた。

散歩時には職員と子どものコラボレーションで「お散歩バック（素材はファスナーつきのビニール袋で、肩掛け用のひもを通した入れもの)」を工夫して作り、自然からの贈り物の落ち葉や木の実、枝他を採取し工作や園での遊びに使っている。そうした中、自然の草花を見つけ持ち帰り、写真で名前を調べ花の絵を描き、「後町図鑑」を作成している。また、新型コロナの影響を受け、今年度は参加できなかったが「善光寺花フェスタ」で使用した花の鉢をもらい大切に育て、色水遊びや、布染（マリーゴールド、たけのこの皮、どんぐりなど）などを行い、楽しんでいる。園内のベランダのプランターでは種類の違うミニトマトを育て、色、形、味の違いを知り、ジャガイモ、スナップエンドウ、トウモロコシなども育て、生長観察や収穫体験をし、給食に取り入れて食の大切さを学んでいる。

当園の園庭は狭隘ではあるが、その環境を有効活用し、活動や遊びを見直し工夫しながら保育を行っており、狭さを感じさせないほど戸外での活動で補っており、職員は安全な道のりの点検を行い、散歩が日常的に行えるように入念な準備を心掛けている。そうした中、子どもたちが自然環境豊かな公園や広場などで外気に触れ、五感を通して様々な感覚や知覚を得、自然の不思議さやおもしろさを感じ、多くの興味や関心を育んでいる。

3)職員の連携

当保育園の職員構成は園長1名、主任1名、保育士6名、パート保育士5名、給食職員2名、代替給食職員3名で、小規模ということもあるが連絡事項や全園児の様子を常に共有し、園職員全体で連携しながら温かな保育を行っている。また、保育士経験の長い職員が多く、自身の子育て経験や人生経験から保育の専門性も高く、経験を生かして伝承遊びや製作を行い保育の充実を図っている。

当園として毎年度、業績評価及び保育所第三者評価の内容評価項目に準じた自己評価(年2回)を行っており、その結果を集計・分析し、自己評価の中での気づきや課題などについては職員会議で検討し、改善に向けて次年度に向けて期末に計画を立て園内研修を実施し、課題の解決に共に取り組んでいる。自己評価を通じて、他者の意見を受け止め自らの保育を謙虚に振り返る姿勢や保育に対する責任感を自覚するなど、組織の中で支え合い、学び合い、継続していこうという体制が形づくられており、保育士としての専門性の向上が図られている。

現在、当園には3歳未満児と幼児の2クラス(組)があり、また、幼児については年齢別に分け別に活動する時間を設けている。日中の職員は園長も含め8名(給食担当職員除く)と、子どもの数、職員数共に少人数で、小規模園という特徴を生かし、一人ひとりの子どもの保育を振り返り発達の状況を共有し成長を見守り、園長、主任、職員、全員で子どもを育くむように双方向のコミュニケーションを図っている。また、毎週、水曜日には職員会が開かれ、更に、年1回、園長面談を行うほか、小規模園であるので必要な時には園長との相談を随時行うことができる。仕事と生活の両立という面でも、時間外労働の削減、時差出勤や行事準備の簡素化、年次有給休暇取

得の促進などに全職員で取り組んでおり、育児や介護、療養休暇などの状況に応じてお互いに融通し合いながら休暇が取得できるようになっている。また、オンラインや参集で実施される長野市や長野県主催の研修会、信州型自然保育(信州やまほいく)研修、子育て塾などに参加した職員からの報告を職員会で行い、職員会ノートにも記録し閲覧・共有できるようにしている。

当園では異年齢の子どもたちでクラスを構成していることから複数の職員が共同で子どもたちを保育し、複数の視点での子どもや保育に対する理解を可能としており職員の連携がスムーズに取られている。一人ひとりが責任をもって保育に取り組み、自立した保育者となっており、また、チーム保育の一員として自由に協議し合える職場風土が醸成されている。

4)保護者との意思疎通

長野市では今年から「保育業務支援システム」を本格的に導入し、保護者へ向けて、日常的な連絡・緊急連絡、感染症発生情報、登降園管理、発育記録・健康記録・身体測定、保育ドキュメンテーションなどを発信しスマートフォン、パソコン、タブレット等で見れるようにし、園内向けには帳票作成(指導計画・日誌等)、個人記録・情報の管理等をパソコン、タブレットなどを使い入力できるようにしている。

「保育業務支援システム」導入で保護者への連絡がスムーズになり、保護者の既読状況なども確認でき、連絡が取れない家庭には直接電話などで声掛けを行っている。感染症の発生状況や個人の身体測定結果などもグラフで継続して確認できることから多様な形で便利に活用されており、出欠確認(登降園管理)にも利用している。連絡がなく欠席した子どもの家庭には、電話で確認している。

未満児については連絡帳を使い保護者と情報交換を行い、連携を密に図っている。幼児については一日の様子を記録したものを「保育業務支援システム」で家庭に配信し、また、写真については個人情報への配慮から玄関に直接張り出し情報を提供している。「園だより」や「クラスだより」も「保育業務支援システム」で発信し、「園だより」では月のねらい、行事、子育て情報などを掲載し、「クラスだより」では保育内容や成長の様子、お願いごとなどを伝え、保護者への理解を図っている。新型コロナ感染拡大の影響を受け自粛ぎみとなっているが保育参加、運動会、お楽しみ会等を行い、日頃の保育の様子や子どもの成長を見てもらう機会も作っている。

「保育業務支援システム」導入で職員の書類作成などの負担が軽減され、保護者への情報も早くスムーズに発信され情報の共有化も進んでいるが、一人ひとりの子どもを大切にし、家庭と連携した保育が引き続き行われるように、小規模園の特性を活かし、保護者と職員の大切な情報交換と信頼関係を築く場として送迎時の会話を密に行い意思疎通を図っている。

◇改善する必要があると思う点

1) 散歩などの園外活動での更なる安全への備え

当保育園は「信州やまほいく認定制度(信州自然型保育認定制度)」の普及型の認定園で3年目を迎えており、散歩など自然と触れ合う機会が多くある中、土砂災害ハザードマップを事務室に掲示し、危険個所を把握している。

子ども達が歩く「お散歩コース」は多岐に渡り、事前に必ず職員が下見に行き、安全を確認した上で散歩に出かけている。また、安全対策を強化するため「園外保育記録簿」の「危険ヵ所」でその箇所を確認している。記録簿はファイルに綴じられて、いつでも見られるようになっており、情報共有している。また、散歩時には園児や緊急連絡先のリスト、応急手当品、笛、筆記用具、水の入った専用のリュックを携行し万が一に備えている

平成30年に改定された保育所保育指針では、その目標として、自然や生命などの事象についての興味や関心を育て、それらに対する豊かな心情や思考力の芽生えを培うことが明記されており、幼児期における自然体験の重要性が謳われているが、自然の中では、不意の災害に遭うことも想定され、また、危険な動物、植物に触れることもあると思われる。ハザード (Hazard:予測できない危険:悪い結果になるか分からないが、その可能性があること。人や物に対して危害や損害を与える可能性のある現象、もしくは行為のこと) とリスク(Risk: 予測できる危険:望ましくない出来事または状態になる可能性とその影響の度合いのこと)の違いを正しく理解し、体験活動の実施場所の下見を十分に行う中で、子どもにとって何が「リスク」となり、何が「ハザード」となりうるのかをイメージすることが大切であるといわれている。

2019年の大津市の保育園児の交通事故以来、交通安全についての警鐘が鳴らされ続けている。

当園でも交通公園での安全教室が開かれており、園外保育でも交通安全指導を兼ねていることから安全指導を徹底しているが、園舎前がすぐ道路になっており、園周辺も交通量が多いことから、今後、散歩などで出かける時は細心の注意を払い、自然体験活動を始める前の事故と怪我への備え等のリスクマネジメント(安全管理)についても更に研修を重ね、知識・スキルを向上させ子どもの安全に備えていくことを期待したい。

７　事業評価の結果（詳細）と講評

共通評価項目の評価対象Ⅰ福祉サービスの基本方針と組織及び評価対象Ⅱ組織の運営管理、Ⅲ適切な福祉サービスの実施（別添１）並びに内容評価項目の評価対象Ａ（別添２）

８　利用者調査の結果

アンケート方式で実施。

長野県福祉サービス第三者評価事業評価結果取扱要領第２条第１項の規定により、有効回答者数が 10 人未満のため、非公開とします。

９　第三者評価結果に対する福祉サービス事業者のコメント

（令和　４年１２月　７日記載）

第三者評価の受審にあたり、長野市が目指す子どもの姿や基本方針に基づき、保育園として園目標①友達と一緒にからだを動かして遊ぶ②自分の思いを伝え人の話を聞くことが出来る子ども③楽しく食事が出来る子どもとこの目標に添って保育が実践出来ているのか、改めて振り返る良い機会となった。

子どもの人数が年々減少して今年度幼児 5 名未満児 9 名の人数となり小規模園として何が出来るのかを考えて一人一人を大切にきめ細かな関わりを心掛けて保育にあたってきた。特にコロナ禍となり保育や行事では制限も多くなり地域や多く人々との交流が少なくなり、出来る事として散歩や戸外活動を積極的に行い地域や商店街の人々に挨拶や声をかけるようにし、徐々に顔見知りも増え関わりが出来た。

園庭が狭く固定遊具もないため戸外活動は散歩を多く取り入れてきたが、安全への備えとして散歩コースの危険箇所のチェックや下見、交通安全の研修、子どもの交通安全教室等取り入れているが、さらにリスクマネージメント委員会を行い安全に留意して活動をしていかなければと実感している。

これからもコロナ禍の中で保護者との信頼関係をどう築いていくか、どのような工夫と保育実践が大切か外部評価を受審しあらためて考えることが出来た。今回の外部評価を通じてさらに職員全員が保育の質の向上を目指し共通認識をして、自園の良さを大切にしながら、保護者に寄り添いきめ細やかな保育を実践していきたい。